

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について

功 渡
刀 辺
洋
悠 子

一 はじめに

本研究は七面山山頂付近に構える敬慎院七面山本社の建築に関する論考である。

七面山は久遠寺に所属し、山岳信仰の霊場から発展を遂げ、懺悔滅罪・現世安穩などの現世利益を授ける七面神信仰が多く、の信者を集める。近世以降、出開帳などで七面大明神が広く知られると、久遠寺から奥の院、七面山までを巡礼地とし、賑わいをみせた。七面山は身延山の裏鬼門の守護神でもあり、このようにして近世には広域な身延山信仰が形成された。なお敬慎院は元来、七面山別当の別当所を指す。¹⁾

現在の七面山本社は安永五年（一七七六）火災後の再建である。本殿・幣殿・拝殿からなり、元来檜皮葺であったが、同九年（一七八〇）建立の本殿および天明五年（一七八五）建立の幣殿は後に銅板に葺き替えられた。同じく天明五年建築の拝殿は現在も檜皮葺のまま保たれている。また現地では社殿について「七面造」と呼んでいる。

一方、近世の建築技術や意匠の手本などを集めた雛形本に記載されている「七面造」がある。この双方の「七面造」

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・ 功刀悠）

はかなり異なる形状を呈している。

筆者はかつて民間に広く流布した七面神信仰の七面堂建築について取り上げた²⁾。甲州、江戸、京都など広範に存在する七面堂ないし七面社は仏堂形式のもの、流造など社殿形式のもの、時には土蔵造などさまざまな形状を見せており、七面神を祀るための堂・社であつて、一般には「七面造」という特定の形式を採らない。

七面山本社を「七面造」と呼称するのは間違いなく七面信仰の本拠地であることに理由がある。それであれば、これとは異なる建築雛形の「七面造」は何に基づくのか、それを解明したいと考えた。総本社である七面山本社について平成三〇年（二〇一八）十二月に身延山宝物館において関連する絵図を詳細に見せていただき、かつ令和元年（二〇一九）七月に現地にて実測調査を実施した。その成果をここに発表するものである。

なお本研究の対象とする七面山敬慎院本社は、「七面山頂上付近にある祖師像・七面大明神が祀られる拜殿・幣殿・本殿（釈迦殿・古仏堂を含む）から成る建物を指す」と定義する。七面堂、七面山本堂、大明神宮、敬慎院寶珠殿・摩尼殿なども称される。実測調査において



図1 七面山敬慎院本社

は本社のほか、隨身門、和光門、奥の院の調査も実施させていただいた。

二 七面山について

(一) 七面山の概要

山梨県の南西部、南アルプス連峰に属する最高標高一九八九メートル、山頂を示す三角点は一八九二メートル、柔らかい地盤の特徴を持つ山である。日蓮聖人の手紙に「なないた(七面)のがれのたけ」との表記が見られることから、当時から崩壊地が存在したことが分かる。特に一之池の裏から赤沢村の麓にかけての大規模ながれは「大がれ」などと呼ばれる。³⁾日蓮宗における山岳信仰の霊場である。

七面山自体は早川町に聳えているが、慶安四年(一六五二)山頂の所有権を巡って、七面山麓集落の雨畑村と赤沢村が対立した経緯があり、その後標高およそ一七〇〇メートルより高所は歴史的に身延山久遠寺の寺領であり、⁴⁾身延町の飛び地となっている。

(二) 七面山の信仰と身延山久遠寺

古くから雨畑村(現早川町)の村民に祀られてきた池大神を中心とする龍神信仰や修験者たちによる山岳信仰、御来光信仰の聖地であった七面山だが、久遠寺の寺領となるとそれらすべての信仰を内包しつつ、総本山久遠寺の守護神として七面大明神を祀るようになった。そして廃仏毀釈を乗り越え、現在も神として信仰されており、日蓮宗徒のみならず広く崇敬を集めている。

七面神信仰に関する先行研究としては中尾堯氏による「七面山の信仰」⁵および林是晉氏による諸研究⁶、そして『身延町誌』⁷などに詳しいので、それらを要約する。

深草元政による寛文六年（一六六六）の『七面大明神縁起』によると、建治三年（一二七七）九月のころ、日蓮聖人がいつものように岩の上に腰を掛け弟子や檀越に説法をしていると、聴衆の中に若く美しい婦人がいた。たまたま来訪した檀越の波木井氏が、この婦人の有様に疑問を抱いたことを知った日蓮聖人は婦人に「本形に復せんや」と華瓶の水を与えると、たちまち一丈あまりの蛇（竜）の姿に変化し「仏勅を蒙り御法神とならん、永く此山をして水火兵革之難有之事無く、其衆生一乗を信受して無上菩提に回向する事有之者は、其所願皆如意吉祥を得せしめん」と誓って去った、としている。このち永仁五年（一二九七）に大檀越、波木井実長と六老僧日朗が七面山に上り、七面天女を祀ったという。

しかしながら前述の先行研究によると、この縁起に書かれている七面大明神と日蓮聖人との邂逅はあくまで伝説であるとするのが通説のようである。

宮川了篤・林是晋両氏監修の著書『法華経信仰の霊場七面山』で語られる七面大明神最初の文献は、天正二〇年（一五九二）十二月八日、日宝が曼荼羅本尊に七面天女（七面大明神）を勧請したものである。一方、望月真澄氏の著書『近世日蓮宗の祖師信仰と守護神信仰』⁸での史料の初見は、久遠寺が所蔵する七面大明神像で、そこには天文十三年（一五四四）霜月吉日の銘文がみられるとし、天正二〇年（一五九二）の日宝が認めた曼荼羅本尊を「七面信仰が次第に知られるところになっていった」と論考する根拠として挙げている。

これらのことより、七面山の信仰が身延山に取り込まれた時期は中世後期から近世初期にかけてと考えられている。

(三) 七面信仰の普及

七面山は江戸期における久遠寺の出開帳により広く庶民に知られるようになる。また徳川家康の側室である養珠院が元和五年（一六一九）、七面山に登詣を果して以降、七面山の女人禁制は解かれた。これに影響を受け、大奥女中の法華信仰の高揚も江戸期を通じてみられた。その結果、総本山への案内書や紀行文にも紹介され、絵図類にも七面山の領域まで描かれるようになった。十七世紀後半になると京都深草山を初めとし地方にも七面大明神が祀られ始めている。

延宝三年（一六七五）、身延三〇世日通上人の代に七面山では仏教寺院に付設された神社建築として本殿・拝殿・庫裏・客寮島の諸堂が新築・改築され伽藍が整備されるに至った。

後の安永五年（一七七六）一〇月十二日夜、火災によってこれらの建築は焼失してしまう。大火から四年後の安永九年に四十七世日豊は本殿を七面山に再建した。

『身延山諸堂記』によると、この時再建された本殿（本宮）、天明四年（一七八四）から翌五年にかけて再建された幣殿・拝殿が敬慎院伽藍の中心をなす。棟梁は久遠寺の宮大工、池上勘解由である。

三 七面山敬慎院域の建築

表参道より七面山に登り進むと、四十六丁目に和光門がある。大正元年（一九二二）に完成した門で、これより先、七面山の神域に入る。四十八丁目には鐘楼と手水舎、四十九丁目には隨身門（大正一〇年＝一九二二）があり、五〇丁目では敬慎院域に至る。

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）

敬慎院域では一之池のほとりに伽藍が広がり、平成十八年（二〇〇六）建築の水中寮、平成九年（一九九七）建築の報恩寮、昭和六十三年（一九八八）建築の東西寮・新寮・下番・札場・大玄関の宿坊施設に隣接して本社がある。さらにそこから外廊下が延び、日朗堂、池大神宮、願満堂へと繋がり、さらに平成八年（一九九六）建築の正行殿、昭和五十八年（一九八三）建築の参籠殿が接続している。

七面山本社は東面して建ち、向いにある石段を登ったところに前述の隨身門があり、その先に遙拝所がある。ここからは富士山を拝むことができ、後方から御来光が指す。七面山においては彼岸の中日に富士山頂から上る御来光が隨身門を通じて現在の社殿に差し込む配置とされている。

ここではまず令和元年（二〇一九）七月の実測調査に基づく七面山本社の建築について概要を述べる。

（一）七面山本社の概要

前述のように七面山史における最大の災厄である安永五年（一七七六）七面山火災ののち、本社は再建され、今日に至る。七面山本社の建築は文禄五年（一五九六）、十八世日賢上人の染筆の曼荼羅本尊に「七面大明神宝殿常住之守護本尊」の脇書があるため、この時に宝殿が存在していたことが明らかである。七面山の伽藍は延宝三年（一六七五）に整備されるが、その前と後、さらに安永五年（一七七六）の焼失で本社の建築が大きく変化した。

現在の七面山本社において拝殿・幣殿・本殿は昭和四十一年（一九六六）に身延町の町指定文化財に指定されている。

安永五年（一七七六）大火以前の規模は『身延山諸堂記』によると本殿が三間半×四間、幣殿が二間半×二間、拝

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）

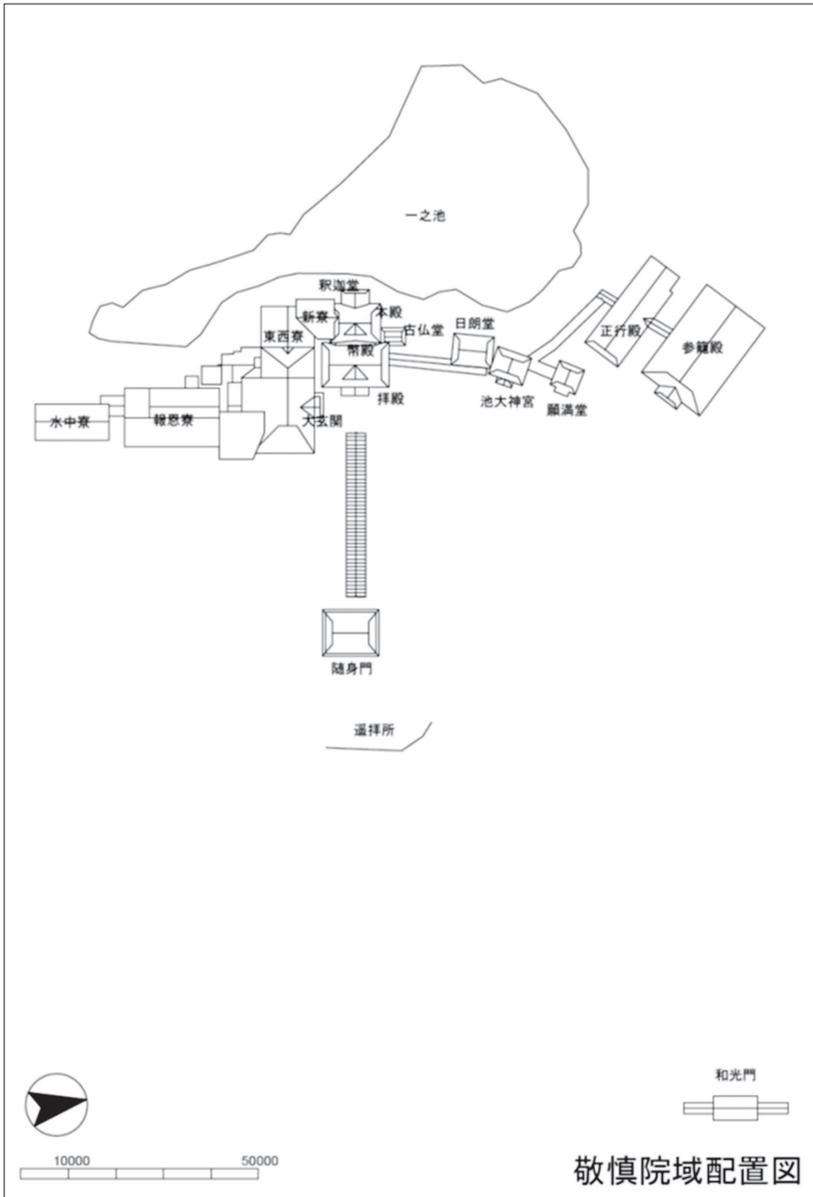


図2 七面山敬慎院配置図

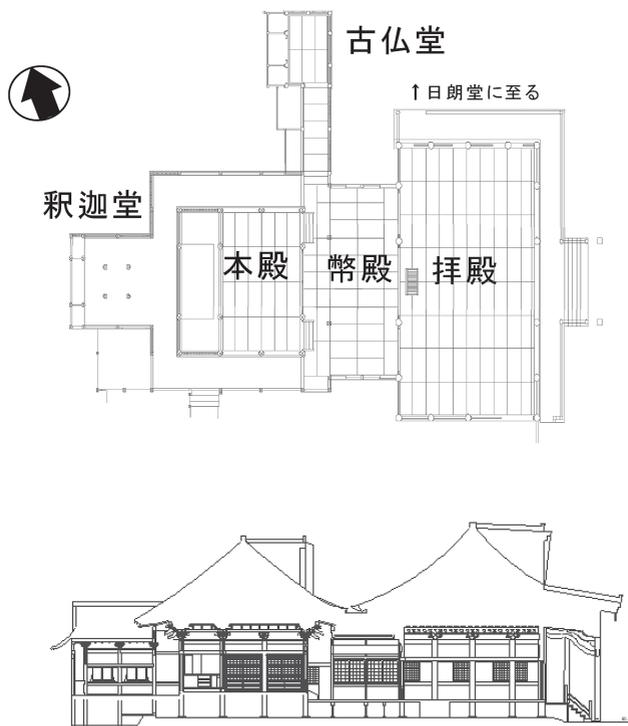


図3 七面山本社平面図（上）断面図（下）

殿が六間×四間で、再建後は本殿が四間四方、幣殿が四間×三間、拝殿が七間半×五間であり、前身建物より一回り大きい。

現状の実長規模は本殿四間×四間半、幣殿五間半×三間半、拝殿八間×五間であるが、周囲の縁の取り込みや柱間のカウントの相違などにより、史料記載と実長とで規模は通常若干異なる。再建社殿が間違いなく現在の七面社である。

（二） 拝殿

拝殿は天明五年（一七八五）に建立された、桁行八間、梁間五間、入母屋造、平入、檜皮葺の建築である。前述のようにもともと拝殿、幣殿、本殿ともに檜皮葺であったが、現在は拝殿のみが檜皮葺

となっている。慶応元年（一八一五）、昭和十一年（一九三六）、昭和五十七年（一九八二）にそれぞれ檜皮の葺替えを行い、平成二十四年（二〇一二）に破風の修理を実施している。

屋根には正面側に千鳥破風を設け、向拝には唐破風を付ける。組物は出組で禅宗様木鼻、実肘木を持ち、中備は間斗束である。室内は円柱、畳敷に格天井である。

格天井には格子の一つ一つに龍の絵が描かれており、七面大明神と描かれた提灯が飾られる。宿坊から続く廊下から直接拝殿の畳敷きの室内へと入ることができ、回廊は正面から北にある日朗堂側の二辺に廻り、そこから日朗堂へと続く渡り廊下となる。

向拝は几帳面取の角柱に大斗・連三斗を載せ、身舎とは蝦虹梁で緊結される。軒は二軒繁垂木であり、向拝桁で飛檐垂木を打越し、先端にもう一段の垂木をつける。

十八世紀後期らしい意匠の大型拝殿であり、檜皮葺のまま維持された屋根正面の千鳥破風と唐破風向拝が強い印象を与える建築である。

(三) 幣殿

幣殿も拝殿と同じ天明五年（一七八五）に建立された、桁行五間半、梁間三間半、両下造、銅板葺の建築である。当初は檜皮葺であったが、明治十八年（一八八五）に銅板に葺き替えられた。平成二十四年（二〇一二）にさらに屋根替を実施している。

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）



図5 拜殿内部



図4 拜殿外観（千鳥破風と向拝唐破風）

本殿と拝殿は円柱、軒は二軒繁垂木であるが、その間をつなぐ幣殿は角柱で軒は一軒疎垂木である。梁間を三スパンに分割し、中央に舟肘木を設ける。中央部の蟻壁には七面大明神が天女の姿に描かれ、天井は折上天井で、大きな龍を描く。脇の間の天井は折上格天井である。

幣殿と拝殿の床は段差なく繋がっているが、境には柵が設けられている。幣殿内には登高座や磬台、経机、信徒からの奉納・寄進品が並ぶ卓が置かれている。さらに幣殿から古仏堂への廊下に繋がる。

（四）本殿

本殿の建築年代は安永九年（一七八〇）で、幣殿・本殿より五年早い。桁行四間、梁間四間半、入母屋造、平入、銅板瓦葺葺の建築である。

幣殿同様、明治十八年（一八八五）に銅板に葺き替えられた。平成二十八年（二〇一六）に内部塗替・葺替を実施した。

屋根の正面側に千鳥破風を設け、そのため棟がT字形をなす。これは拝殿も同じであるが、後述する「七面造」の棟が十字形になることは異なっている。

円柱に台輪を置き、組物は三手先、禅宗様木鼻を持ち、平で二段、隅で三段の尾垂木をつける。



図7 幣殿内部



図6 幣殿外観

廊下と本殿内部の床は五〇センチほどの段差があり、廊下と幣殿は段差なく繋がる。幣殿からは三段ほどの階段で上る。幣殿・本殿境の中央部は柵で仕切られている。本殿の内部は畳敷で、内陣、脇間、外陣に区切られるが、それぞれに折上格天井が設けられ、内陣のみ天井が高い。

幣殿と同じく、蟻壁には七面大明神が天女として描かれており、内外陣境の欄間は彫刻となっている。内陣の須弥壇に宮殿が載る。幣殿接続部以外の三辺に回廊があり、内陣後部の廊下より釈迦堂が併設される。この回廊部は板敷に現状では絨毯が敷かれている。天井は化粧軒裏で、地垂木、飛檐垂木を外から確認することができるが、壁外の地垂木の露出部が短く、縁廻りに後補として壁を立ち上げた可能性がある。壁には禅宗様の花頭窓が設けられている。

(五) 本殿の復原

安永五年に発生した火災後にいち早く建てられた本殿がしばらく独立で建っていたことは明らかであろう。さらに現状では地垂木と縁先の壁面との取合いが不自然であり、当初縁廻りには壁が無かったことが想像される。

これらを踏まえて、再建当初の復原を行った。現在の内部空間からも想像できるように、内外陣が本殿のみで完結する形であり、三間仏堂の平面形状を呈している。

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）



図9 本殿内部



図8 本殿外観



図10 本殿の外壁と垂木

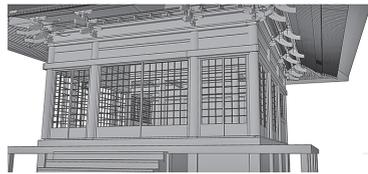
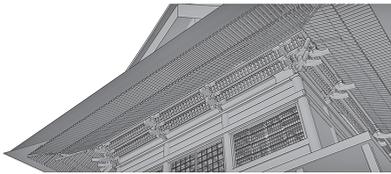
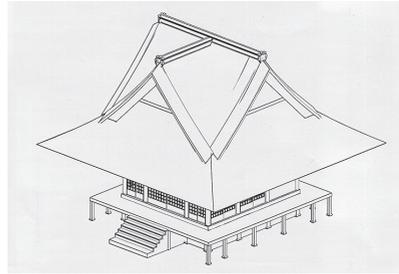


図11 本殿復原（上右：外観 下左：軒 下右：前面）

復原：小嶋大也『七面山敬慎院寶珠殿の建築について』二〇一九年度芝浦工業大学卒業論文

（六） 釈迦堂

釈迦堂は本殿の裏手に置かれており、建築年代は昭和三十九年（一九六四）である。

二間半×二間、入母屋片下造、金属板瓦棒葺である。内廻の組物は出組、外廻は平三斗、禅宗様木鼻付きで、折上変形格天井、堂内中心に宮殿を置く。「身延竹之坊遠藤氏が別当の際、東京都水中心氏が寄進者として落成した」という札がかかる。他に釈迦堂宮殿台座仏天蓋、釈迦堂内陣彫刻一式、釈迦堂前机五具足蓮花の本願人の札が並ぶ。この釈迦堂は一之池に面した崖上に建っていて、基礎はコンクリートである。内部構造は左右対称であるが、南にある宿坊側に物置が隣接している。物置を増築した際に改修したのか、花頭窓が消失しているため、障子は付属しているが開けた先は壁の箇所がある。

（七） 古仏堂

幣殿の北に畳廊下で繋がる桁行二間、梁間一間半、入母屋



上 図12 釈迦堂外観

左 図13 釈迦堂内部

造、檜皮葺の小仏堂である。建築年代は分からないが、明治三十六年（一九〇三）の「大日本甲斐国日蓮宗絵本山身延久遠寺全図」に描かれており、この時には建っていたと思われる。組物は凝った形状の平三斗、禅宗様木鼻があり、中備は台輪上に撥束を置く。花頭窓があるため、禅宗様要素の強い意匠となっている。柱や梁が黒みを帯びているが、一般的に護摩を焚いたときなどに出る煤が原因で木材が黒ずむので、この古仏堂は他所で使用されていた護摩堂等を移築した可能性がある。

四 七面造について

前章では「七面造」として呼ばれる現在の七面山本社建築について記述した。一方、「七面造」とは、『建築大辞典第二版』（彰国社、一九九三年）から引用すると、「江戸時代



図15 古仏堂内部



図14 古仏堂外観

に生まれた神社建築様式の一。浅間造の変形。この名称は日蓮宗守護神の七面菩薩から出たという。平面は十字形。正面中央に唐破風の向拝を付ける。主屋は平入り、入母屋造り。屋根上に方形造りの檼を載せ、檼は正面千鳥破風、両側面は軒唐破風とする。」と定義されている。この姿は現在の七面山本社 of 形態とはかなり異なっている。

そのため『建築大辞典』に記載されている七面造が依拠した江戸時代の雛形書ほか史料を取り上げる。

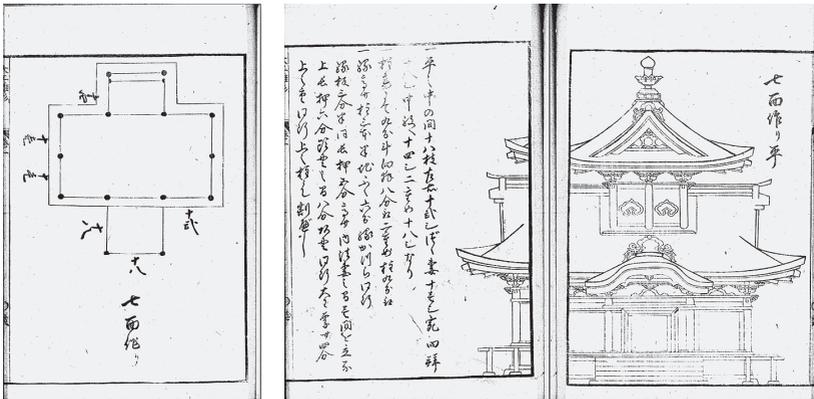


図16 『新撰雛形一、宮形』「七面作り平」

<p>七面作り平</p> <p>一 平之中の間十八枝左右十式シ徒々妻十寸シ宛向</p> <p>一 柱妻にて九分斗向拝八分取二重め柱九分取</p> <p>一 緑高サ 柱三本半地ふく六分緑かつら同断</p> <p>一 縁板三分半同長押五分高サ内法妻之間彫間を立る</p> <p>一 上長押六分頭貫の間八分頭貫同断大わ厚サ四分</p> <p>一 上之重同断上之柱にて割べし</p> <p>現代語訳</p> <p>一、平側、中の間十八枝左右十二枝ずつ、妻側十一枝ずつ向拝十八枝中後へ十四枝 二層目十八枝である</p> <p>一、柱妻側で合計二十二枝となり、柱の太さはその九分、向拝の柱八分、二層目の柱九分</p> <p>一、縁の高さは柱三本半ぶんで、地覆は六分、縁葛も六分</p> <p>縁板は三分半、同縁長押五分 高さは内法が妻の間一問</p> <p>上長押六分、頭貫の間八分、頭貫も同じ、台輪の厚さ四分</p> <p>上の層も同じ</p>

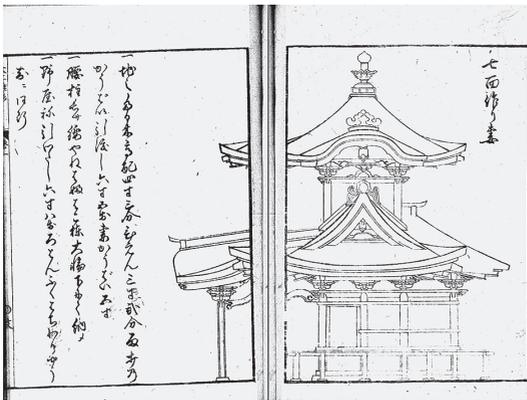
図17 図16の読み下し及び現代語訳

(一) 木暮甚七『新撰雛形一 宮形』須原屋、宝曆九年(一七五九)

『新撰雛形』は江戸時代の大工の雛形書¹⁰⁾であり、一巻の宮形から、二巻門形、三巻堂形、四巻塔形、五巻繪様とシリーズで刊行されている。七面造はそのうちの一卷宮形に春日造、神明造と並んで取り上げられ、平面図と二面の立面図が記載されている。このうち「七面作り平」と書かれた正面の立面図が『建築大辞典』の「七面造」立面とほぼ同じであると考ええる。

雛形は建築平面および立面の各部比率を記したいわば設計マニュアルである。

春日造のような汎用性の高い意匠と並んで記載されているが、七面造は屋根形状を初めとしてかなり手が込んでいるので、施工する機会はあまり多くなかったであろう。



七面作り妻

- 一 地之たる木高配四寸三分飛ゑん三寸式分兩打乃
- かうばい引渡し六寸五分妻かうばい五寸
- 一 腰柱長サ腰やねはこ棟大輪下にて納メ
- 一 野屋拵引わたし六寸八分ろはんふくはちわりやう
- 前二同断

現代語訳

- 一 地垂木勾配四寸三分、飛檐垂木 三寸二分、雨打の勾配引き渡し六寸五分、妻勾配五寸
- 一 腰柱長さ、腰屋根破風、箱棟、台輪の下に納まる
- 一 野屋根の引渡し六寸八分、露盤、覆鉢木割前に同じ

上 図18 『新撰雛形一、宮形』「七面作り妻」

下 図19 図18の読み下し及び現代語訳

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）

(二) 『北斎漫画八編』より

『浮世絵大事典』¹¹⁾によると、『北斎漫画』とは、花鳥山水から人物、架空の動物や伝説上の人物、建築物にいたるまで森羅万象を網羅した葛飾北斎による絵本である。

この写実性から、実物を見て描いたと推測されるが、この八編には建物の名称が書き込まれておらず、「七面作」と建築様式の名称のみ書き込まれている。『北斎漫画』には他の絵本からヒントを得たと指摘される題材もあることから、¹²⁾前述のような雛形書等をヒントに、想像で補って描かれた可能性も否定できない。

(三) 呉羽山の七面堂（富山県富山市）

武内淑子氏の『呉羽山の七面堂』¹³⁾によると、万治年間（一六五八～一六六〇）、藩主前田利次からその土地を拝領した富山藩士が建立した七面堂が存在した。この堂は明治三年（一八七〇）の合寺令で打ち毀されている。

当時の面影を遺すものとして、実際にその七面堂を知っていた方の証言から描かれた絵図が現在の七面堂を管理する立像寺に保管されている。

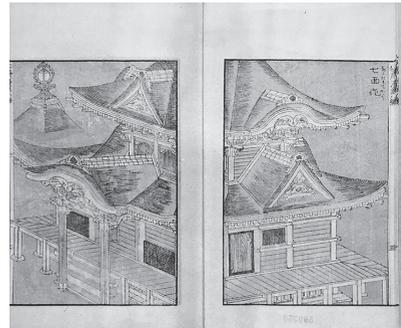


図20 『北斎漫画』七面作



図21 呉羽山の七面堂

(四) 妙傳寺の七面堂（京都府京都市）

「京都本山西身延妙傳寺略圖」には左下に七面堂と記載のついた建物が存在し、前述の七面造の形状とやや異なっているが、特徴の二層建てであることが確認できる。『京都府の近世社寺建築』（一九八三）⁽¹⁾によると、岡崎通の拡張で取り壊されたようであるが、その年代については不明である。七面大明神像は本社に移され、現在も信仰篤く祀られている。

五 七面堂の前身建築形態

(一) 七面山本社と「七面造」

文禄五年（一五九六）、身延十八世日賢上人の染筆の曼荼羅本尊に「七面大明神宝殿常住之守護本尊」の脇書があるため、この時に宝殿が存在していたことは明らかである。

一方、絵図を含む古記録に「七面造」の文字はなく、現在の本社の建築も前述の七面造の様相とは異なっている。何故、いつ頃から、「七面造」と呼ばれるようになったか定かではない。『日連宗寺院の建築』に「今の七面山本社では此の式ではないが、これが略化された趣がなくもない」（藤島亥治郎「日連宗寺院の建築」『仏教考古学講座第十四巻』雄山閣、一九三六年）と記述があるが、ここでは延宝三年の整備前【一六七五】、整備後で安永五年（一七七六）の火災焼失より前の期間【一六七五～一七七六】、焼失後再整備【一七七六】、の三期間の絵図を比較して、各時代の建築と建築雛形にある「七面造」について比較考察したい。

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）



図22 「京都本山西身延妙傳寺略圖」による七面堂

（二）延宝三年の整備前の建築【一六七五】

久遠寺が所持する七面山が描かれている最も古い絵図に「身延山絵図屏風」がある。従来成立年代に二説があり、一説に二十八世日叟上人在世時、万治三年（一六六〇）から寛文七年（一六六七）成立、他の説は三〇世日通上人代、寛文十二年（一六七二）三月から延宝七年（一六七九）二月の成立として¹⁵⁾いる。いずれも十七世紀後半である。

絵図には一之池が描かれておらず、現在は平地に整備されている山頂付近の平地の整備がなされていないようにも見える。「七面明神」の文字のある堂は平入の入母屋造で、四周に縁が廻り、鳥居の先にある。単層の建築であり、七面造の特徴である二層の構成はみられない。またその奥に屋根が二棟みえていることから、七面山敬慎院域が整備され始めた頃と考えることもできる。

延宝二年（一六七四）の「甲州身延山久遠寺惣絵図」¹⁶⁾は左下に刊記「延宝二年甲寅十一月冬至日禅妙考之（江戸京橋林九良兵衛／京寺町二条上丁林氏吉永）開板」と記載があり、身延詣の案内図として広く頒布されていたものと推測できる。



図23 「身延山絵図屏風」の七面明神



図24 「甲州身延山久遠寺惣絵図」による七面社

「七面」の文字の下にある建築は千木のついた切妻造の社殿であるように見え、正面に向拝が描かれている。やはり単層の建物で、「七面造」の様相は呈していない。前述したように、この時期には七面山山頂付近は久遠寺の寺領となり、養珠院が登詣を果たしていたことなど、七面信仰が徐々に周知されていたことが分かる。「くりや」や「棟数十有」の表記も見えることから、参詣者のための施設が必要とされていたことがわかる。しかし、恐らく一之池である表現の位置が実際と異なることなど、検討の余地がある絵図である。

(三) 伽藍整備後・火災焼失前の建築【一六七五～一七七六】

『身延山史』によると、延宝元年（一六七三）一〇月の大鐘堂に続き、同三年には本殿、幣殿、拝殿、廊下、御供所、庫裡、客殿、籠堂、池大神宮、隨身門、推鐘乃堂等、諸堂が建立された。同年八月に遷座式が執り行われた。

『身延山諸堂記』による主立った規模の記載は以下の通りである。

- 一 明神本宮 三間半二四間
- 一 幣殿 二間半二二間
- 一 拝殿 六間二四間
- 一 廊下 二間二四間 二通り有之
- 一 御供屋 三間四方
- 一 庫裏 六間半二八間半
- 一 池太神宮 七尺二一間

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）

一 隨身門 二間半二三間半

一 鐘堂 九尺四方

これらの建築を描いたと推定される延宝三年（一六七五）以降、安永五年（一七七六）に焼失するまでの絵図を四点紹介する。なお隨身門と鐘堂は火災焼失を免れた。

概ね宝永年間（一七〇四～一一）に描かれた「身延山絵図」〔図25〕

成立年代推定江戸中期とされる「身延山絵図」〔図26〕

成立年代不明「身延山絵図」〔図27〕

宝暦十二年（一七六二）に刊行された「身延山図経」〔図29〕

図26に関して成立年代は不明であるが、伽藍の様相が図25と酷似しているため、同様の年代の伽藍を描いたものと推測される。図25～27はそれぞれ広く頒布される木版刷、一点物の絵図として描かれているが、内容が非常に似ているため、信頼性は高いとみる。

それらには拝殿から伸びる廊下、もしくは幣殿、そして縁周りが高い本殿が確認できる。一の池の表現もされており、現在の配置図と大きく変わりはない。



図25 「身延山絵図」の大明神宮



図26 「身延山絵図」の大明神宮

い。

拝殿は平入で入母屋屋根と推定できる。拝殿の後ろに幣殿があるが、これは本殿の上の層に繋がっているように見える。本殿の床下は不明であるが、上層の屋根と下層の屋根が二重に設けられる「七面造」とは形が異なっている。

現存する大社造で最も古い神魂神社（鳥根県・国宝）の社殿に似ている。両者の関係は不明であるが、さらに比べると、神魂神社は妻入の大社造であるが、七面山本社の本殿は平入で切妻造ないし流造の屋根形式である。棟から幣殿にかけて降棟があり、先端には唐破風が設けられている。この点でも異なっている。

現在の七面山本社とは異なり、火災焼失前の本殿は床高がかなり高かった。その理由は何か。まず参拝者は拝殿前方から後方の高い本殿を望むことができる。そしてもう一つ、ご来光に関する可能性がある。

七面山においては彼岸の中日に富士山頂から上る御来光が隨身門を通じて現在の社殿に差し込む配置とされている。本殿が拝殿より高いと、この光を確実に本殿から望むことができる。推論の域を出ないが、絵図に示される中世の神社様式に近い形態が七面山本社の前身であったことは注目に値する。

次に、安永五年（一七七六）焼失の少し前に発行された「身延山図経」では、敬慎院に繋がる廊下が描かれておら



図27 「身延山絵図」の大明神宮



図28 神魂神社
(天正十一年=一五八三)

ず、本社が単独した建築になっている。また本殿の屋根の形態がそれまでと違って妻入に描かれている。そのため伽藍含め、一度改築した可能性がある。しかし天妃祠と書かれた本殿はやはり高床の建築に描かれ、天都宮と書かれた拝殿と幣殿で繋がれている。

（四）焼失後再整備の建築【一七七六】

『身延山史』などでは堂宇残らず焼失した、との記載が多いが、『身延山諸堂建立記』では「安永五年一〇月十一日夜回祿七面山堂宇不残（鐘堂・隨身門ノコル）」との記録がある。焼失後、順次伽藍の再建がなされ、さらに宿坊が徐々に拡張されるなど、多くの参詣者に対応できるようになった。安永九年（一七八〇）本殿、天明五年（一七八五）幣殿・拝殿に続き、明治二〇年（一八八七）奥の院、大正元年（一九一二）和光門、大

正一〇年（一九二二）隨身門が造られた。昭和に入っても二〇年（一九五〇）に池大神宮が改修され、昭和四十九年（一九七四）に本殿奥に釈迦堂が建立された。昭和五十八年（一九八三）参籠殿、同六十三年（一九九八）東西寮、平成九年（一九九七）報恩寮、平成十八年（二〇〇六）水中寮と現代にも伽藍整備が続けられている。

図30「身延山一覽表獨案内」²¹は明治十四年（一八八一）に発行された。幣殿と本殿の屋根が葺替えられた明治十八年（一八八五）前の発行であるため、屋根表現が次の図31と異なる。

図31「大日本甲斐国日蓮宗総本山身延久遠寺全図」²²は明治三十六年（一九〇三）に印刷発行されている。この絵図ではかなり伽藍が整備され、現在とほぼ変わらないことが確認できる。また、建立年代不明としていた古仏堂がこの



図29 「身延山図経」天妃祠と天都宮

絵では確認できる。七面山本社は火災後の再建からは構造変更を伴う改築は行われていないと考えられる。なお図30までは敬慎院の建築群を南東方向から見ていたが、この絵図では北東方向から見て描いている。

(五) 現在

建立から度重なる改修を経て、屋根の部材や、壁の位置、他堂との接続などの変更

を行ってきた。伽藍域全ての建物が繋がっていることや、縁廻りに壁を立ち上げたことなどは、厳しい山頂の天候に順応してきた形であろうと推測する。そしていつの頃からか、本社は「七面造」と呼び習わされており、その呼称が七面大明神を祀る総本社に相応しい威厳と風格とともに現在に伝わっている。

六 結び

七面山敬慎院本社の建築様式は「七面造」と呼ばれているが、その発生時期を正確に辿ることはできなかった。建築雛形の中に掲載された七面造は一棟で完結する二層の建築であるが、現在の七面山本社は本殿・幣殿・拝殿が繋がった複合社殿であり、すべて単層である。この複合社殿を慣例的に「七面造」と呼んできたことと推測できる。

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）



図30 「身延山一覽表獨案内」七面山



図31 「大日本甲斐国日蓮宗総本山身延久遠寺全図」

一方、七面山本社を延宝三年（一六七五）の伽藍整備前、整備後から安永五年（一七七六）焼失までの間、焼失後再整備の三期間に分けて調べた結果、いずれも二層の建築ではなかったが、焼失前の本殿が高い床をもつ特殊な形態だったことが分かった。

拜殿から屋根の高い幣殿が接続し、床の高い本殿が続いている特徴は、複数の絵図で確認できる。よって「七面造」のような二層建築ではないにしても、本殿の屋根高さは通常の建築よりゆうに一層分高い。これが、七面信仰の流布とともに七面信仰の本山の建築の特徴として伝播し、やがて完全な二層の建築に昇華され七面造の雛形として完成したのではないかと推察される。

特に安永の大火前の絵図の中で少し表現が違っていた「身延山図経」の描写であるが、拜殿（天都宮）の前面に立ち本殿（天妃祠）までを見通した立面を描くと拜殿の上に本殿の屋根が乗るように見えるので、「七面作り平」の立面によく似たものになる。

但し『新撰雛形』の発行は一七五九年、「身延山図経」は一七六二年であるため年代的には難しい仮説である。むしろ「身延山図経」が雛形の絵を参考にした可能性がある。



図32 『新撰雛形一 宮形』より七面作り平

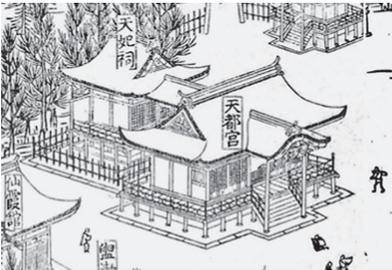


図33 「身延山図経」

なお大火の前後で特に本殿の形態が大きく変わったが、その理由は何故かを考える必要がある。一つには十八世紀の半ばには甲州でも本殿・幣殿・拜殿がほぼ水平に繋がる権現造に似た複合社殿が増えており、再建に際して時流に乗った建築形態を選んだ、というのが理由であろう。

一方、安永の火災は大災厄であり、参籠の信者も多数死傷した。これを契機として身延貫首日唱上人は七面大明神を邪神と称したとされ、西谷檀林との間で係争となる。不受不施派を疑われた彼は牢死し、身延の歴史を除かれた。⁽²³⁾以後、平成二十六年(二〇一四)に復歴するまで約二四〇年間「除歴日唱」などと呼ばれてきた。災厄とそれに続くこの不幸な出来事を乗り越え、七面山信仰の拠点を新たに築くために、従前とは全く異なる本殿の形状を選んだのではないだろうか。

本研究を進めるにあたり、七面山敬慎院には全面的にご協力いただき、かつ身延山久遠寺布教部の林是恭氏と宝物館の池田優季名氏には大変お世話になった。また松井角平記念財団からも平成三〇年度研究助成(助成期間…二〇一九年四月～二〇二一年三月)を受けて進めることができた。末筆ながら記して謝意を表したい。

註

(1) 七面山および七面神信仰に関わる研究として以下を参考とした。

中尾堯「法華修行の霊場―身延・七面山」『日本の聖域 第三巻』佼成出版社、一九八一年

中尾堯「七面山の信仰」『富士・御嶽と中部霊山』名著出版、二〇〇四年

石川教張・宮川了篤「山岳信仰としての七面山」『身延山・七面山…内藤正敏写真集』所収、耕土社、一九八一年、一四二頁

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について(渡辺洋子・功刀悠)

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について（渡辺洋子・功刀悠）

宮川了篤・林是晋監修『法華経信仰の霊場七面山』かまくら出版、一九八三年

望月真澄『身延山信仰の形成と伝播』岩田書院、二〇一一年

『身延山史』一九七三年

(2) 渡辺洋子「山梨県南巨摩郡における在郷七面堂建築について」『日本建築学会計画系論文集第四九五号』日本建築学会、一九九七年

(3) 宮川了篤・林是晋監修『法華経信仰の霊場七面山』かまくら出版、一九八三年、九頁

(4) 『身延山史』一二六頁

(5) 註(1) 前掲書

(6) 林是晋『身延山久遠寺史研究』所収「七面山」他、平楽寺書店、一九九三年

(7) 身延町誌編纂委員会編『身延町誌』サンニチ印刷、一九七〇年

(8) 望月真澄『身延山信仰の形成と伝播』岩田書院、二〇一一年、二八頁

(9) 久遠寺蔵

(10) 日本建築学会図書館デジタルアーカイブスにて画像引用

(11) 国際浮世絵学会『浮世絵大事典』東京堂出版、二〇〇八年、四四五頁

(12) 前掲『浮世絵大事典』四四五頁

(13) 武内淑子『呉羽山の七面堂』二〇〇七年、引用・挿絵

(14) 京都府教育委員会『近畿地方の近世社寺建築二（京都）』東洋書林、二〇〇二年、一七七頁

(15) 望月真澄『近世日蓮宗の祖師信仰と守護神信仰』平楽寺書店、二〇〇二年、一〇二頁

(16) 西尾市岩瀬文庫蔵

(17) 西尾市岩瀬文庫蔵

(18) 久遠寺蔵

(19) 久遠寺蔵

(20) 北澤光昭『身延山図経』の研究』地人館、一九九八年

- (21) 望月真澄『身延山を歩く』イーフォー、二〇一一年収録
- (22) 久遠寺蔵
- (23) 註(6) 前掲 林是晉『身延山久遠寺史研究』所収「日唱の身延除歴事件」
- 〈キーワード〉七面山、七面造、本殿・幣殿・拝殿、建築、実測調査

七面山敬慎院本社の前身建物と七面造について(渡辺洋子・功刀悠)